夕張編(仮)・艦これ二次創作小説

Clown

「ここ……で良いのよね……」
　リュックサックを背負った少女はきょろきょろと辺りを見渡し、次いで目の前にある鋼鉄のゲートを見た。煉瓦造りの立派な門柱には、そこが彼女の目当ての場所であることを示す看板が据え付けられている。
　大湊警備府。
　海に面している所為で、ゲートの向こう側には水平線が見えていた。潮風が緩やかに吹き付け、緑のリボンでまとめた明るく灰色がかったポニーテールを揺らしていく。横須賀にいたときと同じ半袖のセーラー服にスカートの出で立ちでやって来た彼女だが、肌を撫でる冷たい感触に激しく後悔していた。何もかも友人達の忠告を無碍にした自分が悪いのだが。
　ゲートの左右には何かの建物があるが、奥は湾に向けて緩やかな下り坂となっており、彼女が最初に目指すべき建物の姿はここからは見えない。一応敷地内の地図は頭に叩き込んでいたが、平面の図と実際の光景のギャップに少し戸惑いを覚える。
　閉ざされたゲートの前には、一人の男が立っていた。厳めしい顔をした制服の男は右手を腰に差した警備棒の上に置き、じっと前方を見据えている。少女が近づくと一瞬彼の目がぎょろりと動き、彼女を震え上がらせたが、すぐに前方注視に切り替わった。そのまま再び直立不動となる。
　今すぐ帰りたい衝動に駆られたが、横須賀からここまで六時間以上かけてはるばるやって来たのだ。この程度で回り右するわけにはいかない。そう心に言い聞かせ、少女は握り拳に力を入れ、男の眼前に立った。
「あ、あの。本日付で大湊警備府へ転属となった、夕張です。入っても良いですか？」
　おそるおそる口にすると、男は再び少女の方をぎょろりと向く。頭二つ分近く背の高い彼に見下ろされると、まるで自分がネズミか何かになってしまったようだ。
　夕張と名乗った少女はしばらくそのまま固まっていたが、やがて思い出したようにスカートのポケットを探ると、ピンク色のパスケースを取り出した。かわいらしい熊の絵が描かれたケースを裏返すと、中には一枚の紙が入っている。
　大湊警備府・所属証書。
　横須賀を出る前に上司から渡されたものだ。略式だが、日本国海軍の印章が押された歴とした証書である。
　男は目の前に差し出された証書を、表情も変えずにじっと見つめた。大丈夫、なはずだ。この証書は本物だし、転属の連絡もこちらには伝わっている。見た目は軍の施設に用事のありそうな風体では無いが、彼らなら分かるはずだ。
　しばらく固唾を呑んで見守っていたが、やがて男が動いた。いつの間にか手にしていた無線機に向けてぼそぼそと呟くと、そのままゲートの脇へと歩いて行く。それと同時に、重い鉄のゲートが左側に向けて開いていった。
　ほっと息をつくと、少女・夕張は開かれたゲートの内部へと歩を進めた。ちらりと横を見ると、先ほどの男はゲート脇で相変わらず前方を見据えている。驚異的な生真面目さに思わずくすりと笑うと、夕張は頭の中の地図を思い出しながらゆっくりと歩き始めた。

　大湊警備府提督、斑目(まだらめ)剣(つるぎ)中将。新たな上司となる彼のいる、執務室に向けて。

○

「はわ～、今日も良い天気なのです～」
　小柄な少女が箒を片手に空を見上げている。夏の日差しは強いが、潮風の影響もあって暑すぎず快適な気温だ。のんびりと掃除をするにはちょうど良い。
　茶色がかった髪をまとめ上げ、胸元に錨のマークをあしらったセーラー服に身を包んだ少女は、道路の上の小さな石ころや葉っぱを箒でささっと掃きながら移動する。
「お、いつもすまないな」
「いえ～、好きでやっていることですし」
「今日は訓練は休みかね？」
「金剛さんが哨戒任務当番なので、今日は私が秘書代理なのです」
　途中、整備班の一団や将校達の挨拶に笑顔で挨拶を返しながら、今日の目標に定めた給食棟までの道のりを丁寧に掃き進めていく。
　と、遠くの方に見慣れない人影があるのを見て、少女は歩を止めた。なにやら辺りをきょろきょろ見渡しながら、こちらに向かってくる。彼女の来ているものとは意匠の違うセーラー服の少女だ。少なくとも、この警備府の中では見覚えが無い。
　どうやら何かを探しているらしい姿を見て、少女はぴんときた。確か、司令から本日付で転属してくる『娘』がいると言っていた。多分、彼女がそうなのだろう。
　少女が声をかけようとすると、ちょうど同じタイミングで向こうもこちらに気付いたようだった。「あの、すいません」と言いながら駆け寄ってくる。ライトグレーのポニーテールを揺らしながらやってくる少女・夕張は、小柄な少女の前まで来ると軽く息を整えてから尋ねた。
「あの、提督執務室って、どの建物ですか？　覚えてきた地図と場所が合わなくて……」
　困った顔をする夕張に、小柄な少女はにこりと微笑むと、箒を左手に持ち直して右手で海沿いにある煉瓦造りの建物を指さした。
「あそこが執務室のある司令部庁舎なのです。ご案内しますね、夕張さん」
「え？　ど、どうして名前を……」
　突然名前を呼ばれて狼狽える夕張に、小柄な少女は「良かった、あってたのです」とほっとするように言い、改めて夕張に向き直って頭を下げた。
「ごめんなさい、びっくりさせてしまって。司令官さんから、お話は聞いているのです。私は秘書艦代理の電(いなづま)と言います。よろしくお願いします」
「あ、あの、こちらこそよろしくお願いします！」
　思わず頭を下げる夕張。自分より年下に見える電と名乗った少女だが、秘書艦代理と言うことは勤続年数も実績も、自分より遙か上の存在のはずだ。見た目の年齢や容姿などは彼女たちには関係ない。軍という組織に属しながら、階級すらも無意味となる存在。それが、彼女たち。

「兵装実験軽巡、夕張。大湊警備府に到着いたしました！」

　日本国海軍所属・対深海棲艦(しんかいせいかん)特殊人型艦船――通称、艦娘(かんむす)。

○

「やぁ、良く来たね。私がこの大湊警備府の提督、斑目剣中将だ。よろしく頼む」
「は、初めまして。兵装実験軽巡として着任しました、夕張です。ふつつか者ですが、今後ともよろしくお願いいたします！」
　電に連れられて執務室に向かう途中、偶然執務室から出てきた提督と鉢合わせになった。夕張の姿を見ると、提督はにっこりと笑ってねぎらいの言葉と自己紹介を行った。夕張は突然の事にしどろもどろになりながら挨拶を返す。
　三十代後半くらいか、まだ若い提督だな、と夕張は思った。門番の男ほどでは無いがすらりとした長身の彼は人好きのする顔で、軍服に身を包んでいなければとても軍人とは思えない容姿だ。とはいえ、中将を名乗るからには相当辣腕のはずだ。横須賀鎮守府にいた中将クラスは皆四十代後半から五十代前半で、いずれも様々な武勲を挙げたつわもの揃いだった。年功序列的なところもあるが、特に戦果を挙げた者は四十代前半でも中将に取り上げられた者もいる。それでも、目の前の彼が中将というのはかなり異例のようにも思える。
　特殊な事情があるのか。それとも。
「そう言えば、ここまでは何で来たんだい？　迎えのバスを用意するよう言付かっていたから、待機させていたのだけど」
「え、そうなんですか!?　ごめんなさい、私、地理を覚えながら来ようと思ったので、大湊駅から歩いて来ちゃいました……」
「はわわ、駅から歩いたのですか？　三キロ以上あるのです……」
　電が驚いた声をあげる。はまなすベイライン大湊線の終着駅である大湊駅から、大湊警備府までは約四キロある。物資輸送の面からも鉄道を延ばす計画があったようだが、資金面など様々な問題から実現できずにいた。現在駅から警備府までの交通手段はもっぱら民間のバス・タクシーと、警備府が独自に運用している定期バスのみだ。徒歩でも来れない距離では無いが、実際に歩いてくる人間は珍しい。
「横須賀でも、なるべく地理に慣れようとあちこち歩いたので……これくらいなら」
「なるほど。私はつい車に頼ってしまうからな。健康のためにも見習った方が良いのかも知れん」
「あまり無理をすると、余計に健康を害するのです……」
　提督の真面目な言葉に、心配そうな声をかける電。そんなに無理な運動かしら……などと思いながら二人の会話を聞いていると、廊下の奥から鼻歌を歌いながら歩いてくる人影が見えた。明るい青みがかった髪の、いかにも今時の女子高生然としたブレザー姿の少女だ。

　彼女は提督の姿を見ると、ぱっと嬉しそうな顔をして片手を挙げた。
「お！　提督じゃん！　チィース！」
「!?」
　まるで友人にあったかのような気軽さの挨拶をかます彼女を見て、夕張は思わず目が点になった。いくら艦娘が階級に縛られない存在だからと言っても、提督は彼女たちを指揮し、運用する直属の上司だ。彼女のいた横須賀にも他の将校にため口で喋る艦娘はいたが、提督にだけは敬語を使っていた。自分もどちらかというとフランクなしゃべり方をする方だと思ってはいるが、ここまで馴れ馴れしく提督に声をかける艦娘は見たことが無い。
　しかし電も、とうの提督すらも一向に気にした風も無く、やって来た少女を迎えた。信じられないことに、提督は自ら手を挙げて彼女とハイタッチなどしている。
「鈴谷(すずや)、どうだった、資源輸送は」
「いや～、それがさぁ、途中でリ級重巡の襲撃を受けてさ～もう大変だったんだから～」「はわわ、それは大変だったのです」
「その割にはぴんぴんしてる気がするが」
　鈴谷と呼ばれた少女は「へへーん」と得意げな顔をして続ける。
「輸送船に気を取られたリ級を、鈴谷の主砲でドカーン！　一発撃破よ！」
「凄いのです！」
「いや、輸送船を囮にするなよ……」
　何となく肩を落とす提督に、鈴谷は「褒めてくれないと任務放棄するぞ～」と半ば脅しをかける。提督は諦めたように鈴谷の頭を撫でると、懐から取り出したチケットのようなものを鈴谷に手渡した。彼女はそれを受け取ると、「やった～！　あざ～っす！」と飛び跳ねながら向こうの方へと去って行く。
　あまりの光景に開いた口がふさがらない夕張。今のはいったい、と問おうとする彼女の後ろから、さらに別の闖入者がやって来た。
「提督……私の甲標的を知らないかい？」
　今度は白を基調としたセーラー服の少女。黒いお下げ髪を弄びながらやって来たその少女は、あろう事かサンダルをぺたぺた鳴らしながら歩いてくる。
「なんで私が知ってると思ったんだ、北上(きたかみ)……装備品は自分たちで管理してくれと言ってあるだろう」
「んー、そうなんだけどさー、これがなかなか面倒で……」
「あ、甲標的なら整備の人が運んでいるのを見たのです。多分、整備棟にあるのです」
「おー、さすが電っち。初代秘書艦は有能だねぃ」
　電の指摘に感嘆の声をあげた北上と呼ばれた少女は、「今度お礼するよー」と言いながら整備棟があるらしき方に向けてぺたりぺたりと歩いて行く。
　何からツッコんで良いか分からない、といった表情の夕張。それを見て、提督と電は顔を見合わせて苦笑した。
「色々と言いたいことはあるかも知れないが、取り敢えずここではこれが日常、と言うことにし

ておいてくれないかな」
「本当は、風紀とかも考えるのが一番良いとは思うのですけど……この空気が気に入って、ここに来てくれた艦娘も多いのです」
　そう言って、二人は苦笑いを浮かべたまま夕張の方を見た。彼女はまだ困惑顔を浮かべていたが、やがて吹っ切れたように笑顔を見せた。
「分かりました。そういうことなら、私も精一杯馴染めるように頑張ります！」
　両腕でガッツポーズを作り、やる気を見せる夕張。提督と電は再び顔を見合わせると、くすりと笑った。どうやら賑やかになる要因が一つ増えるらしい。そう思いながら、改めて歓迎の意を表そうと握手のための手を提督が差し出した、そのとき。
「あー！　こんなところにいた！」
　提督の後方から可愛らしい大声が響き、提督の動きが固まる。悪戯が見つかった子供のような、困ったような表情をする提督と、困った笑顔の電を見て、今度は何が来たのかと夕張は提督の背後を覗き込む。すると、いつの間に来たものか、栗毛の少女が提督のすぐ後ろに立っていた。
「全くもう、探したのよ、司令官」
　言いながら両手を腰に当てて頬を膨らます少女は、電と同じ意匠のセーラー服を着ており、背格好も電とほとんど同じだった。顔立ちや髪型も似ているが、こちらの少女の方がややつり目がちで勝ち気な印象を受ける。
「雷(いかづち)、ちょうど良かった。今日は新人の……」
「またお昼ご飯食べに来なかったでしょ！　そんなんじゃダメよ！」
「いや、あのな」
「今日のご飯当番は鳳翔(ほうしょう)さんなのよ！　ちゃんと残してあげてるんだから、さ、行きましょ！」
　何とか話を反らそうとする提督に対し、全く聞く耳を持たないまま、雷と呼ばれた少女はめいっぱい背伸びをすると強引に提督の襟首を掴み、そのまま斜めになった提督をずるずると引きずって言ってしまった。
　なすがまま連行されつつも「電、後の案内は頼んだ」とだけ残していった提督が廊下の角に消えていったのを、二人は為す術も無く見送った。
「あ、あの……いつもはこんなじゃないんですよ？　もう少しちゃんとしてて、その……」
　半ば狼狽えながらも気まずそうに言い訳する電を見て、夕張は最初に感じた疑問が全部すっ飛んでいくのを感じた。年若き中将。いったいどんな紆余曲折があって中将の地位を、そして、伝統的に名前は警備府だが鎮守府に比肩するほどの組織である大湊の統轄司令という地位を得たのか。それは多分、目の前の小柄な秘書艦代理が言っていた通りなのだ。

　――ここの空気が気に入って、ここに来てくれた艦娘も多いのです。

　元来の性格によるものかどうかは分からないが、この空気感を醸成しているのは恐らく提督その人なのだろう。そこに人が集まり、艦娘も集まり、そしていつしか彼を慕う者達でいっぱい

になった結果、彼を頂点とした警備府が出来上がった。
　実際はそんな簡単な話では無いのだろうが、夕張はそれで納得することにした。それを追ったところでどうにかなるものでも無いし、それで自分が納得できるのなら、それで良い。
　ここで共に戦うのに、不足は無い。
「で、では、早速警備府内を案内するのです。まずは艦娘寮に行って、荷物を……」
　気を取り直した電が、何故か妙にさっぱりした顔になっている夕張を連れて寮へと案内しようと歩を進めた、その時。

『警報発令。警報発令。警備府正面海域に深海棲艦出現。ただちに迎撃態勢をとれ』
「「!!」」

　甲高い警報音とともに、ひとときの平穏は、破られた。

○

「まったくもう！　ご飯もゆっくり食べられないじゃない！」
「いや、お前は食べたんだろう、雷。食べてないのは私だけだ」
「司令官の空腹は、私たちの空腹よ！　ちゃんと食べなきゃダメよ！」
「どういう理屈なんだ……」
　夫婦漫才のような応酬を繰り返しながら、提督と雷は錨地に向かった。雷は途中で別れて整備班の待つドックに向かい、艤装を装備する必要がある。提督は早足で一人錨地に到着すると、既に到着していた電を見つけた。艤装を装備し、後は水上移動の要である主機を装着するだけとなっている。
「早いな、電。近くにいたのか？」
「はい。ちょうど夕張さんを寮に案内するところだったのです」
　久々の実戦に緊張しているのか、電は腰につけた魚雷発射管を撫でつけて気を紛らわせている。最近は他の艦娘に実戦を任せて、準秘書的な役割や戦闘を忘れない程度の訓練を行う程度の電だったが、練度で言えば並の艦娘など足下にも及ばない。沈めた深海棲艦の数は全ての鎮守府、警備府を合わせても十本の指に入るほどだが、当の本人はあまりそれを誇らしげには思っていない。出来れば敵でも助けてあげたい、というのが彼女の口癖でもあった。
「で、その夕張は？」
「あ、もうすぐ来ると思うのです」
「ん？　先に来て待ってもらえば……」
　そこまで言って、提督は錨地に見慣れない主機があることに気付いた。
　艦娘の所属する鎮守府、および警備府の錨地は、通常の船舶が要する錨地とは意味合いが異なる。艦娘は艦船と言う名は与えられているものの、基本は普通の人間であり、生活基盤は陸上にある。更に言えば、通常船舶のような巨体を浮かべる必要も無い。彼女たちが海上を移動する

際に用いるのは主機と呼ばれるもので、ほとんどは厚底の靴のような形をしていて、実際に足に装備して移動することになる。
　そのため、錨地はこれらの主機を装備し、外海に出るための滑走路のような場所になっている。湾に向けて傾斜した水路を有し、その頂点に位置する水平部に出撃する艦娘の主機が並べられることになっていた。主機は専用の錨で繋がれており、そこで主機を履いて抜錨、傾斜水路を滑走して原速で外海に出られるようになっている。
　今ここにある主機は、電と雷、そして先程甲標的を探し回っていた北上のもの。そしてもう一つ、見慣れないハイカットスニーカーのような主機が浮かんでいる。
　もしや、と思っていると、予想した声が向こうからやってきた。
「お待たせしました！　艤装に時間がかかっちゃって……」
　すっかり艤装に身を包んだ夕張が、雷や北上に遅れて走ってきた。軽巡洋艦に分類される夕張の艤装は、駆逐艦に分類される電や雷のものよりも一回り以上大きい。重雷装巡洋艦として魚雷発射管を両舷計四十門装備している北上と比べても遜色ない重武装で、ほとんど重巡洋艦クラスに近い。
「夕張。今日来たばかりで大丈夫なのか？　休んでいても構わないが」
「いえ、早くこちらの環境に慣らしておきたいので……その、構いませんか？」
　控え目に許可を求める夕張に、提督は特に断る理由も無く首肯した。他の面子を見渡すと、彼女たちにも異論は無いらしく、それぞれ頷いて各々の主機の元へと向かう。夕張も一つ頭を下げると、自分の主機の元へと向かった。
　主機を始めとした艤装は、いずれも彼女たち専用にカスタマイズされた、この世に一つしか無い代物だ。対応する艦娘にのみ装備することが許され、それ以外のものには決して装備することは出来ない。彼女たちが装備して初めて、艤装は強力な戦力となる。
　実際には、艤装が艦娘を選んでいるとすら言われている。艦娘は生来から艦娘として生まれてくるのではなく、ある時から徐々に艦娘としての記憶を引き継ぐのだという。そもそも艦娘とは何か、何故存在するのかも解明されていないのが現状だ。それでも、そんな彼女たちに頼らざるを得ない状況が、今まさに目の前に存在している。
　深海棲艦。突如出没し、世界中の海路を寸断した正体不明の生命体群。
　今、この海域にも。
「敵影は四。駆逐艦クラス三体と軽巡洋艦クラス一体と思われる。皆の練度なら特に問題は無いと思うが、油断はするな。また、夕張は当海域では初実戦となるため、無茶しないようフォローしてやってくれ。旗艦は北上だ、通常指揮は任せる」
　それぞれ主機を装備し終えた艦娘に向けて、提督が出撃命令を下す。艦娘達は主機の回転数を上げると、各々のタイミングで次々と抜錨した。
「了解。重雷装巡洋艦、北上、出撃します！」
「駆逐艦、電、抜錨なのです！」
「駆逐艦、雷、いっきますよー！」
「軽巡夕張、出撃！　……って、あ、ちょ、ちょっと待ってー！」

勢いに乗り損ねた夕張だけがやや遅れたタイミングで抜錨したが、すぐに他の三人と合流できたようだ。まずは基本となる単縦陣となり、敵影が報告された海域へと向かう。提督はそれを見送ると、錨地に隣接された司令棟へと向かった。
艦娘達は艤装とは別に、それぞれ骨伝導スピーカーを内蔵した無線機と小型のビデオカメラを装備している。これらの映像や音声は司令棟にあるモニターとスピーカーで出力され、そこから状況判断した提督が各艦娘に指令を出せるようになっている。かつては一度指令を出したが最後、全ては現場任せとなっていたが、このシステムのおかげで戦場での勝率が大幅に上がった。
提督は壁面に広がるモニターを眺めながら、椅子に腰掛けた。四人分の映像が分割されて流れ、逐次状況を把握していく。音声は基本的に全て拾っているが、ボリュームは絞られており、向こうから特別な報告が無いか、こちらから強制解放しない限りはほとんど環境音しか聞こえない。
「北上、どうだ」
「んー、電探にもまだ引っかかってこないねー。逃げたかな？」
「油断するなよ、最近威力偵察と思われる敵艦の報告が各鎮守府でも相次いでいる。今回もその類いかも知れない」
「とりあえず湾内を一周してみるねー」
「頼む」
大湊鎮守府は平舘海峡を出入り口とする陸奥湾に面しており、侵入口が限られることもあってか深海棲艦の襲来は比較的少ない。それでも近年単艦ないし少数の艦群の目撃報告が増えており、漁船などの被害も目に見えて増えてきている。ホタテの養殖が盛んな湾内だがこれも被害を受けており、湾から引き上げた業者も多い。
画面に映し出されるのは、やはり穏やかな海だけだ。北上の言う通り、逃げ出した後なのかも知れない。ただ、報告のあった敵影の編成が提督には気になっていた。軽巡一、駆逐三。この数日来、各鎮守府から報告のあった威力偵察部隊に似ているのだ。そしてもう一つ、気になる報告があったが……。
「電探に感あり！　来ましたよー！」
北上の報告で我に返った提督は、モニターに視線を戻した。まだ目視では確認できないが、北上がちらりと映した電探のスコープには確かに目標と思われる光点が映し出されている。
しばらく息の詰まる時間が流れる。相変わらず海は凪いでいるが、しばらくすると、ほんの僅かだが彼方に黒い点が見え始める。そして、
「敵艦見ゆ！　深海棲艦・駆逐ロ級三、軽巡ホ級一、なのです！」
黒い波を引き連れ、敵艦隊が姿を現した。顎の発達しすぎた深海魚のような風体の駆逐艦クラス、そして巨大な砲塔を担いだ深海魚の口からヒトの上半身だけが飛び出たような異形の軽巡洋艦クラス。いずれも便宜上のクラス分けではあるが、火力や航行性能など、ほとんどのステータスが既存の軍用艦船と一致している。
そう、『艦船』と。
「さーて、甲標的も見つかったことだし、ギッタギタにしてあげましょうかねー！」

　北上は不敵に笑い、後続の艦娘に第一戦速を指示すると、自身も速度を上げ、搭載していた甲標的を海中に放った。甲標的は静かに潜行すると、次第に加速して最大船速まで到達し、あらかじめ設定された目標に向けて搭載した二門の九七式酸素魚雷を発射する。
　すると、放たれた魚雷は甲標的から一定の距離を越えた地点で急激に巨大化し、まるで圧縮された空間を展開したかのように本来の魚雷の大きさに姿を変えた。そのまま五十ノットを超える速度で敵艦に向けて疾走し、標的を捉える。
　瞬間、敵艦隊の最右翼に位置した駆逐ロ級が水柱とともに吹き飛んだ。バラバラになった船体が海面にばらまかれ、沈んでいく。
「大当たりー」
「流石なのです！」
　得意げに胸を張る北上と賞賛する電。何の前触れも無く味方艦が吹き飛んだ深海棲艦の群は速力を上げて散開し、こちらに向かってくる。同時に、中央にいた軽巡ホ級の主砲が火を噴いた。
　放たれた砲弾は、敵艦から射出されてしばらくすると、先ほどの魚雷同様、瞬時に巨大化した。二十キロを超える鉄の塊が艦娘達に降り注ぐ。爆音とともにいくつもの水柱が立ったが、それらは艦娘達の偽装を濡らしただけだった。
「わわ、あっぶなー！」
「あいつの狙いは大雑把だから、ホ級は後回しにして、先にロ級を叩くよー」
　北上の指揮で彼女たちは散開し、砲弾の雨を縫ってなお敵艦の群れに突き進んでいく。
　深海棲艦、そして艦娘達が艦船として扱われる所以は、その超常的な空間圧縮および概念変容にある。深海棲艦の武装や艦娘の艤装は、単なる兵器のミニチュアではない。それらは彼女たちが所有権を有する間は彼女たちの概念に従った姿形を保つが、一度彼女たちから放たれると元の物理的性質を取り戻す。彼女たちが保有すればせいぜい薪材程度の大きさしか無い魚雷も、一度放たれれば大質量の鉄と爆薬の塊となり、テニスボール大の砲弾も鋼鉄を貫く凶器となる。
　これが、深海棲艦討伐を艦娘に依存している理由でもある。通常の軍艦では、海上に浮かび高速移動する人間大の的を狙い撃つことなど不可能に近い。電探にも映らず、目視で確認できる頃には砲撃を当てることもままならず、おまけに火力も軍艦と同等となれば、為す術も無い。しかし、スケールの同じ艦娘ならばそれに対処できる。おまけに空間圧縮や概念変容は敵からの被弾にも適応され、例え直撃弾をもらっても、大怪我は免れないものの木っ端微塵になるような事はまず無い。当然、それは敵側にも同じ事が言えるが、概念が彼女たちと異なるためか、先の駆逐艦のように容易に吹き飛ぶことも多い。
「今度は私の番よ！　逃げるなら、今のうちだ、よ！」
　雷が速力を上げ、ばらけた敵艦のうち左翼側の駆逐ロ級を狙って主砲を撃ち込んだ。一発目で至近弾が得られ、敵艦が大きく傾いだところを次手の一発が直撃する。もう一体のロ級がその後ろから追ってくるが、雷は今度は砲撃せず、相手の砲撃を躱しながら目当ての場所まで誘い込んだ。
「電！」
「なのです！」

雷が叫ぶとほぼ同時、電の腰に装着された魚雷発射管から六機の魚雷が放たれる。放射状に放たれた魚雷はロ級の進路をふさぎ、急速回頭して回避しようとするロ級にうち一発が突き刺さった。爆音とともに轟沈する敵艦を見届け、電は周囲を見渡す。
最後に残った軽巡ホ級は、金属を擦り合わせたような薄気味悪い叫び声を上げ、後方にいた夕張と交戦していた。夕張の砲撃はホ級を夾叉(きょうさ)しているものの、執拗な砲撃による水しぶきが邪魔しているためか有効弾を当てることが出来ないでいる。
「あーもう！　しつっこい！」
向こうの砲撃も散漫で当たることはまず無いが、ずっと攻撃を避け続けるのも辛いし、何よりこちらの砲撃も当たらないためストレスがたまる。横須賀でもそれなりに実戦経験も実績もある夕張だったが、ホ級一体も仕留められない現状に環境の違いがもたらす影響を感じざるを得なかった。
「夕張、焦るな。今北上が向かっている。そのまま前進し、雷と合流するんだ。合流後、左右に散開。北上が仕留める」
「わ、わかりました！」
提督の声に、遠くの方からこちらに向かう北上の姿を目視で確認すると、夕張は最大戦速で一直線に滑走した。偶然近くに着弾した衝撃に一瞬姿勢がぐらついたが、すぐに持ち直し、その先にいる雷の元へと主機を駆る。
雷は夕張に向けて手を振ると、そのまま反転して夕張と同じ方向に走った。徐々に主機の回転数を上げ、夕張の右隣に並んだところで速度を合わせると、目配せしてカウントダウンを始める。
「三、二、一！」
「「散開！」」
二人の声が揃い、雷は左、夕張は右と互いに交差してそれぞれ逆方向へと走る。夕張を追っていたホ級は一瞬逡巡したように速度を落とし、すぐさま回頭して再度夕張の方へと向かう。だが、その足踏みが命取りとなった。
「ふふん、逃がさないよっと！」
北上の両腕に装備された各五門、計十門の魚雷が一斉に発射される。いっぱいに広がった魚雷群は網のようにホ級を囲い込み、次々と爆発してその船体を吹き飛ばした。
「これが重雷装艦の実力ってヤツよ」
にまっと笑うと、北上は合流してきた艦娘達に手を振った。電と雷は手を取り合って喜びながらやって来て、対して夕張は半ば落ち込みながらの合流となった。
「うー、全然良いとこ見せられなかったー」
心なしか艤装まで下を向く夕張のしょんぼり具合に、北上はぱたぱたと手を振って応える。
「いやー、でも囮も重要な役割だからねー。雷(いかづ)っちとのユニゾンも、即席の割にはぴったりだったし」
そう言って、北上は笑顔で夕張に右手を差し出した。夕張は一瞬面食らったようにしていたが、やがてその手をおずおずと握った。

「これからもよろしくねー、夕張……ユウバリンでいい？」
「そ、それはやめてください！」
　全身で拒否感を表す夕張に、再び笑う北上。電と雷もその光景を眺めながら、互いに笑いあう。
　その和やかな空気を、提督の声が切り裂いた。

「全員待避!!　すぐにそこから離れろ!!」

　あまりの強烈な怒声に、四人は弾かれたように最大戦速で二手に分かれた。直後、彼女たちの背後で轟音とともに水柱が上がり、凍り付いた笑顔の四人にしぶきを浴びせかける。呆ける間もなく彼女たちは即座に散開し、一気に後退した。北上の電探がそれの接近を猛烈にアピールしだしたが、既に目標は視界に捉えられている。
「じゅ、重巡リ級」
　遠くの方に見える敵艦影。黒いビキニ姿の艦娘にも見えるが、両腕に当たる部分に装備した漆黒の巨大な主砲と瞳に宿る青白い炎が、彼我の差を決定的としている。
　重巡洋艦リ級。鈴谷が輸送任務中に出くわしたと言っていた艦と同じタイプだった。重巡の名に違わぬ八インチの三連装砲を有し、見た目に反した重装甲故にこちらの砲撃も通りにくい。
「軽巡ヘ級もいるのです！」
　ホ級とは容姿の異なる軽巡洋艦ヘ級も、少なくとも三隻確認できる。リ級一隻なら今の編成でも何とかなるが、これだけ数がいると無傷では済まない。
「すまない、発見が遅れた。すぐに応援を出す。持ち堪えられるか？」
　提督のやや落ち着きを取り戻した声に、艦娘達も冷静に状況を分析し始める。砲撃の面では夕張が唯一重巡に対抗しうる火力を有するが、まだこの海域になれていない所為か本領を発揮できていない。必殺の魚雷はまだ北上が三十門残しているが、電は撃ち尽くしてしまっている。雷と夕張も保有しているが、二人あわせても十二門。
　相手の全体数が分からない以上、全力で当たるのは厳しいが、やるしかない。そう結論づけ、後退したまま北上が全員に指令を出した。
「まずヘ級を片付けよっか。電っちは上手く一隻誘導して、雷っちが魚雷で仕留める。夕張っちは直接沈められればベストだけど、追い込んでくれれば私が雷撃で吹き飛ばす」
「分かったわ」
「頑張るのです」
「それしかないわよね」
　残る三人の同意を得て、北上は右手を挙げる。
「それじゃあ、全軍進撃！　無理しない程度にやっつけちゃうよー！」
　振り下ろされた右手を合図に、再び戦端は開かれた。

○

「も〜、提督ったら人使い荒いなぁ」
「そう言ってくれるな、鈴谷。すぐに動ける艦娘はお前と鳳翔だけなんだから」
「そうですよ。皆が苦しんでいるときにのんびりしている訳には参りません」
　緊急放送で呼び出された鈴谷は、ポシェットのように肩から提げた主砲をぶらぶらさせながら口を尖らせたが、鳳翔と呼ばれた女性がやんわりとたしなめると「しょーがないなー」と言いながらも主機を装備し始める。一方いつもの和装に身を包んだ鳳翔は、長く艶やかな黒髪を手早く後ろにまとめ、艤装である弓矢と飛行甲板をもう一度確認してから、一足先に装備していた下駄のような主機の踵を揃えた。
「恐らく、あれが威力偵察部隊の本隊だ。攻撃力の低い艦隊で相手をおびき寄せ、油断したところを急襲する。舞鶴がこの手にやられて損害を出したと報告が上がっていた。不覚だった」
「今更そんなこと言ったってしょーがないじゃーん。今は目の前の敵艦をぶっ飛ばすのが先でしょ？」
　提督の後悔を、鈴谷は軽くあしらう。鳳翔が苦笑いをしているが、恐らく彼女も思いは変わらないだろう。今は、仲間の窮地を救うのが先だ。
「よし。頼むぞ、鈴谷、鳳翔」
「了解。そんじゃ、最上型重巡鈴谷、いっくよー！」
「軽空母鳳翔、出撃いたします」
　対照的な出撃の声をあげ、抜錨した二人は一気に加速した。湾内に躍り出ると、交戦中と思われる場所を目視で補足、最大戦速で向かう。軽空母である鳳翔はその間に三本の矢を同時につがえた。矢羽根に日の丸の描かれた鋼鉄製の矢は、空に放たれると概念変容が解かれ、三機の艦上爆撃機「彗星」となる。
「空母は先制攻撃出来てイイな〜」と羨む鈴谷の横で、鳳翔は微笑しながらも視線は戦場の様子を見ている。次第に詳細が見えてきたそこでは、雷の魚雷が見事軽巡ヘ級の船体を捉え、ようやく一隻目を轟沈させたところだった。
「やっと一隻よ！」
「おつかれなのです！」
　囮役の電が雷に横づけてねぎらう。しかし、残り二隻のヘ級と、何より重巡リ級が残ってる。夕張はやはり苦戦しているらしく、一度はヘ級一隻を追い込んだが、北上が魚雷を発射する直前に回頭・全速力で離脱し、惜しくも有効弾を得られなかった。
「もう！　なんで当たらないのよ！」
「落ち着いて、夕張っち。一度私たちも離脱するよ」
「で、でも、もうちょっとで」
　言いかけた夕張を制し、北上が東の空を指さす。それを見て、夕張は息を呑んだ。
「あれは……彗星⁉　援軍が来たのね！」
「そーいうこと。行くよー！」
　北上の合図を受け、夕張も戦闘海域から一旦離脱する。ヘ級は砲撃を繰り返しながら追いかけ

てきたが、彗星の姿を確認するや高角砲をセットし、撃墜すべく乱射し始めた。しかし時既に遅く、急降下してくる彗星は爆弾をばらまき、即座に離脱していく。
　爆風とともにヘ級が宙を舞った。時を同じくして、別の地点にいたヘ級もほぼ直撃を受け、為す術無く沈んでいく。リ級の元へ飛んだ彗星は、リ級の対空射撃で打ち落とされたらしい。無傷のリ級は、艦娘達と一定の距離を置きながら航行し、こちらの出方を窺っているようだった。
「おっまたせー！」
「お待たせしました」
　戻ってきて小型化した彗星を飛行甲板に収納した鳳翔と、挨拶がてらリ級に主砲を打ち込んだ鈴谷が他の四人と合流した。ほっとするのもそこそこに、六人の艦娘は最後の一隻と対峙する。今となっては油断しなければどうという事の無い相手だが、先ほどのこともある。いつ新たな増援があるかも分からない。
　半分でリ級を叩き、もう半分で周囲を警戒する。攻撃隊に北上、鈴谷、そして夕張。警戒は鳳翔の放つ零式水上偵察機と電・雷。瞬時に割り振り、攻撃隊の指揮を預かった鈴谷が持ち前のテンションの高さで突撃の合図を、
「さてさて、突撃いたしま」

　――ドーン!!

　突然の爆音に遮られた。あまりのことに目を白黒させる鈴谷達の前で、リ級が火だるまになりながら横殴りに吹き飛んでいく。さながらＢ級コメディーのように海上をきりもみしながら飛んでいったリ級は、海面に叩きつけられるとそのままぴくりとも動かずに沈んでいった。
　しばし、沈黙が降りる。仲間が増え、大盛り上がりの空気が瞬間的に冷凍されたような状況で、誰一人言葉を発することが出来ないでいた。普段冷静沈着な鳳翔も、どうして良いか分からない表情で棒立ちになっている。
　そこへ、リ級の吹っ飛んだ反対の方向から、場にそぐわない脳天気な声が聞こえてきた。
「ワォ！　一撃必殺ネー！」
「お姉様、いくら相手が気付いてないからって無茶な砲撃はやめてください。民間船が通りかかったらどうするんですか」
「モゥ、霧島は心配性ネー」
　独特の主機の動力音を響かせ、高速で滑走してくる二つの機影。それを見て、電がようやく呪縛から解けたように声をかけた。
「こ、金剛さん！　お帰りなのです」
「オゥ！　イナズマ！　お留守番ありがとネー」
　栗色の髪をなびかせ、まるで巫女装束のような衣装に身を包んだ女性は、電の前までやってくると彼女の頭を満面の笑みでなで回した。その様子を見て、夕張以外の他の面子も緊張が解けた様子で次々と金剛の周りに集まっていく。
「ちょっとぉ、鈴谷の出番かーえーしーてーよー！」

「もうちょっと早く帰ってきてくれると助かったんだけどねー」
「何よもう、ビックリさせないでよね！」
「ご無事で何よりです」
　四者四様の挨拶を受け、金剛はニコニコしながらそれぞれに応えていく。その様を、夕張はじっと見ていた。主砲・副砲を満載した巨大な艤装と、それを自在に操る豊満な体。独特の口調は、元々英国生まれだからと言われているが、実際のところは誰も知らない。
　横須賀でも話しに聞いていた、高速戦艦、金剛四姉妹。元はばらばらの鎮守府に在籍していたが、現在は皆大湊に籍を置き、各鎮守府の要請に応じて応援出撃もこなしているという。彼女はそのネームシップ、つまり長女だ。
　後ろでため息をつきながらその様子を眺めている眼鏡の女性も、同じ金剛型だ。肩の辺りで切りそろえられた黒髪とその顔立ちからは、とても金剛と姉妹には見えないが、別に血を分けた姉妹というわけでは無い。艦娘が引き継ぐ記憶に刻まれた、魂の絆とでも言うべきものが、彼女たちを姉妹たらしめているのだという。
　しばらく五人の艦娘達と話をしていた金剛は、少し離れた位置で見ている夕張に気付いた。話を中断して夕張の元へ移動すると、少し緊張した様子の夕張に向けてにっこりと笑いかける。
「あなたが、テートクの言っていたニューフェイスの夕張ネ！　私は大湊警備府・斑目提督の秘書艦、英国生まれの金剛デース！　ヨロシクオネガイシマース！」
「ほ、本日着任しました、兵装実験軽巡の夕張です。よ、よろしくお願いします」
　今日三度目となる自己紹介をしながら、夕張は再び不安を覚え始めていた。こんなに個性的な人達の中で、私、ちゃんとやっていけるのかしら、と。

○

「うーん、やっぱり主砲と副砲はバランス良く乗せた方が良いんじゃ無いかしら。対空が不安なら機銃を乗せても良いけど、その分雷撃は弱くなるわよ？」
「それは困るな。対空を犠牲にしてでも魚雷は積んでおきたい」
「もしくは主砲を十センチ連装高角砲に換装するのはどう？　火力は若干落ちるけど、その分対空性能は上がるはず」
「なるほど……アリだな」
　一通りアドバイスを受けると、右目に眼帯をした艦娘は礼を言って工廠へと去って行った。夕張は一息つくと、新たに開発された機銃の図面や諸元表とのにらめっこを再開する。
　着任当日の慌ただしさから二週間。戸惑うことも多かったものの、夕張は兵装実験軽巡としての役目を着実にこなしつつあった。演習区域の一角に専用の部屋をあてがってもらい、警備府内にある装備品を装備できるものは一通り試してデータを集めていく。工廠での試作兵器も見学し、こうして図面をもらえるまでになった。
　相変わらずフランクに過ぎる艦娘達との付き合いは、今でも戸惑いを隠せないことがあるが、それも次第に慣れつつある。特に電と秘書艦である金剛が間を取り持ってくれることが多く、警

備府内のコミュニケーションでの不自由は感じずにいられた。
「どうだ、夕張。仕事は順調かい」
「あ、提督！　お陰様でバッチリです！」
　訪室した提督に、夕張はガッツポーズで答える。近々大きな作戦があるらしく、なかなか執務室にもいない提督だが、こうして巡視する程度には暇が出来たらしい。
「皆とも上手くやれてるようだね。さっき木曾が上機嫌で工廠に向かって行ったよ。夕張のおかげで装備に悩まなくて済むと」
「そう言って貰えると、頑張った甲斐があります」
　照れくさそうに言う夕張。しばらく近況報告などの他愛ない話をして提督と別れた後、夕張はざっと目を通した書類をファイルに綴じ、棚に整理して何時間かぶりに部屋の外に出た。
　既に日は傾き始めていたが、夏の暑さはまだ健在で、穏やかな潮風が気持ち良い。来たばかりの時はあんなに肌寒く感じたのに、慣れるものね、と夕張は微笑んだ。どうやら、自分もすっかりここの娘になったらしい。
　うーんと伸びをすると、夕張は再び部屋に戻った。今日中にさっきの機銃の調整と試し打ちを一度は終えておきたい。工廠からは装備品の改良について意見も求められている。やることは山のようにある。これから益々忙しくなるだろう。
　でも、それで良い。それが良い。夕張は、山と積まれた資料の一ページを、開いた。

(了)